

# 關於終助詞‘ね’

深尾まどか

東吳大學日文系博士生

## 中文摘要

本文主張終助詞‘ね’的語意內涵為顧慮聽話者的情報，並規定‘ね’的語意是「聽話者能同意或者能理解說話者的判斷內容」。「可以理解」的更進一步說法是「可以同意」說話者的言談內容。這個‘ね’的語意內涵可以適用於所有的句型裡。對於聽話者是否能夠理解、同意說話者言談判斷的準確度有些差異。「ね」對於聽話者能否同意其談話內容，若不是 100%同意，也就是說假使有 1%的不確定，「ね」可以轉換為「だろう」。另一方面，「だろう」對於談話內容表現出說話者 100%的確信的時候無法轉換為「ね」。「だろう」表現出說話者 100%的確信的時候，說話者與聽話者之間不存在認知上的差距、也可以使用「だろう」。

關鍵詞：顧慮聽話者、說話者判斷、同意、理解、確定

# 終助詞「ね」について

深尾まどか

東呉大学大学院博士課程

## 要 旨

本稿では「ね」には聞き手配慮があると考え、「ね」の意味を「聞き手が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断を表現する」と規定した。「理解できる」の更に進んだ段階を「同意できる」と考えている。この「ね」の意味は全ての文タイプに共通して適用することができる。この「ね」の中心的な意味は、間投助詞、感動詞にもあてはめることができると考えられる。そして、話し手の「聞き手が理解できる、同意できるだろうという判断」には確かさに幅があり、「ね」は、命題に対して、聞き手が同意できるかについて、100%確かではないとき、つまり、1%でも不確かな気持ちがあれば、「だろう」と置き換えが可能である。一方、「だろう」が命題に対して、話し手の100%の確信を表現するときは、「ね」に置き換えられなく、その場合、話し手と聞き手の間に、認識のギャップがあるものとなないものがあることがわかった。

**キーワード：**聞き手配慮、話し手の判断、理解または同意できる、確信

# The Meaning of ‘Ne’

Madoka Fukao

Graduate Student of Soochow University

## Abstract

In this paper the meaning of a Japanese sentence-end particle, ‘Ne’ is defined as a speaker’s judgment that listeners’ will understand or agree to the speaker’s statement. This definition of ‘Ne’ can be applied to all the sentence types. There exists a range of certainty in the speaker’s judgment. ‘Ne’ can be replaced by ‘Daroo’ when the speaker is not 100% certain that listeners will agree to the statement. When ‘Daroo’ expresses a 100% certainty of the speaker, it can’t be replaced by ‘Ne’ and it is used under the condition that there is no recognition gap between a speaker and listeners as well as under the condition that there is a recognition gap.

**Key words** : sentence-end particle, ‘Ne’, speaker’s judgment, listener’s agreement, speaker’s certainty

# 終助詞「ね」について

深尾まどか

東呉大学大学院博士課程

## 1. はじめに

「ね」についての先行研究は数多い。大きく3つに分けられると考えられる。第1は、「ね」が使われるのには、話し手と聞き手の間に、同程度の情報量が存在するとする説（一致説）であり、第2は、聞き手の情報量は関係なく、話し手の心の中で計算が必要とされるという説（計算説）である。第3は、話し手の聞き手に対する同意を求める気持ちを表すという説（同意説）である。第1の説は大曾（1986）、益岡（1991）他によるものであり、第2の説は蓮沼（1988）、金水（1993）、片桐（1997）他によるものであり、第3の説は時枝（1951）、佐治（1957）、鈴木（1976）、Uyeno（1971）他によるものである。

本稿では、これら先行研究について検討し、本稿で考える「ね」の意味について考察する。そして、確認要求の「だろう」と「ね」が相互に置き換えられる条件、「だろう」が使えて、「ね」が使えない場合について、考察する。

なお、「ね」には他に「ねえ」と長く伸ばすものがあるが、本稿では両方を考察の対象とし、特に断わらない限り「ね」で「ね」と「ねえ」の両方を代表させる。



## 2. 一致説と計算説

第2節では一致説と計算説について検討する。

### 2-1 一致説

大曾（1986: 92）では、「ね」は「基本的には話し手と聞き手の間に同程度の情報 同じような判断 考えが存在するということを前提とする」とされる。益岡（1991: 99）では文を演述型と訴え型に分けて「ね」の意味を考えている。そして、演述型の文ではほぼ大曾と同じ結論に達し、訴え型の文では「ね」は「話し手と聞き手の意向の一致を表す」とされる。

しかし、「ね」は聞き手が知らない情報を伝える場合にも使われる。次のような反例が蓮沼（1988: 94）で既に出されている。

(1) A: 理想の女性は何？

B: やっぱり、しとやかで優しい女ですね。（下線は引用者による。）

### 2-2 計算説

計算説は、聞き手の情報や判断の量を問題にした一致説とは違い、「ね」の使用には話し手の心の中の基準に照らした確認が必要であるとする説である。順番に諸説を検討して行こう。

蓮沼（1988: 94）は、「ね」について次のように指摘している。

発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということを、話し手が話の場に持ち出し確認する。

蓮沼（1988: 94）で挙げられている例文を次に引用する。

(2) A: 大震災当時の東京はどんな様子でしたか。

B: そりゃあひどいもんでしたね。

(3) A : 大恐慌は本当に起こるのでしょうか。

B : 起こると思いますね。

(2)、(3) では、「自己の内部知識、記憶といったものに照らして、今述べていることが確かにそうだということを、話し手が確認しつつ発言しているといったプロセスが読みとれるが、それを示しているのが」(蓮沼 1988: 95)「ね」であるとされる。しかし、次の「ね」には「話し手が自己の記憶に照らして、確認しつつ発言しているといったプロセス」は感じられない。

(4) 久司 : ここへはよく来るの？

つくし : 昼間はね。(青春 I : 69)

(5) 麻子 : いつ話してくださる？

久司 : うん、休みの日になったら、じっくり腰落ち着けてね、話し合おうかと思ってるけど。

麻子 : 頼むわね。(青春 I : 43)

(6) 久司 : じゃ、これで。

つくし : そうお？ 気をつけてね。(青春 II : 31)

(4) では、「ここへよく来る」のかどうか聞かれたつくしが「昼間は(よく来る)ね」と「ね」を使い即答している。ここへよく来ているつくしにとってこの答を出すのに、「自分の記憶に照らして確認しつつ発言する」必要はないと考えられる。(5) では息子の大地の成績のことで心配した麻子が、夫の久司に大地と話をするように頼む場面であるが、ここでも「自分の記憶に照らして確認しつつ発言する」というより、「ね」を使うことで、聞き手に対する配慮が感じられる。(6) でも同じことが言える。

次に、金水 (1993) を検討する。

(7) A : あなたのお名前は？

B : 中村太郎です (?ね)。

(8) A : お年は？

B : 36 です ( ? ね ) 。

(9) A : お子さんの年齢は？

B : もうすぐ、12 ですね。

(10) A : 勤めて何年ですか。

B : もう 20 年になりますね。

金水 (1993: 119, 120) は、(7)、(8) に見られるように、話し手の個人情報の中でも、ほとんど検索・計算なしに引き出せるような情報では「ね」をつけると奇妙な感じがするが、(9)、(10) のように答えるのに何らかの検索・計算過程を必要とするような情報では、「ね」が自然に使えるという北野 (1993) の観察から、「ね」について次のように述べている。

「ね」には常に情報のマッチングが関与すると考えることができる。マッチングとは、話し手が入手している仮説の集合の 1 つと、当該の発話が含意する仮説の集合とから、等価な情報が引き出せるかどうかを計算することと定義しておく。

そして、「ね」の意味を「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」と規定する。「ここでいうリンクとは、情報が等価であると見なし、同一視することである。マッチングが必要なのは、表現と状況との同一性に不安定な要素がある場合である」と言う。しかし、次の用例はどうであろうか。

(11) これは、菜の花ね。どうして、お花が咲くか、わかる？ (窓ぎわ: 102)

(12) 母さんがね、ニギリ飯たくさん用意するの。それ頬張りながら、父さんからコワイ話、聞くの。弟は耳ふさいで、布団ひっかぶってたけどね。(青春Ⅱ: 31)

(13) いいかい？ 今日の先生だよ。なんでも教えてくださいからね。(窓ぎわ: 424)

(14) ママ、ちょっと出かけてくるわね。(にぎやか: 13)

(11) は、先生が菜の花を指して説明する場面であるが、ここで「表現と状況と

の同一性に不安定な要素がある」(金水 1993: 120) とは考えられないが、「ね」が使用されている。(12) は子供の頃の嵐の夜の体験について語る場面であるが、ここでも「表現と状況との同一性に不安定な要素がある」とは考えられず、はっきり覚えていた子供の頃の楽しい思い出について語っているという印象を受ける。(13) は、校長先生が農夫の 1 日先生を皆に紹介する場面であるが、この先生が「なんでも教えてくださる」という「表現と状況との同一性に不安定な要素」はないと考えられるが、「ね」が使用されている。(14) でも同じことが言える。

片桐 (1997) を検討する。片桐 (1997: 244) では「ね」は「話し手が何らかの情報源から当該の情報を得たが必ずしも受容できていないことを示す」とされる。次に片桐 (1997: 238、244) で挙げられている例文を引用する。

(15) ちょっと銀行へ行行って来ますね。

(16) 今日の試合には野茂が登板するらしいね。

片桐 (1997: 245、246) によると、(15) では「話し手は提案内容を未受容のものとして提示し、聞き手の承認を求めるという含みを持つ」とされ、「共同行為としてとらえた対話の分析の観点」に立って終助詞の機能を説明している。片桐 (1997: 245) を計算説の 1 つとしたのは「ね」の機能を「話し手の情報状態のみによって説明」しているためである。しかし、次の「ね」はどうであろうか。

(17) むこうにいる間、すっごく心細かった。すっごい寂しかったんだからね。

(「できちゃった結婚」フジテレビ)

(18) ムカツクわね! (「美川憲一の超穴場知ってんのよ!!in LA」テレビ朝日)

(19) 困ったわねえ。(にぎやか: 11)

(20) 話題が金銭に及んだり、金銭を見たりしたとたん、厳粛な顔になる連中のほうが、わたしにはわからんね。(にぎやか: 25)

(17) では、会えない間「すっごい寂しかったんだから」と言う話し手の言葉には強い主張が感じられ、「情報が受容できていない」とは考えられない。また「ね」に「聞き手の承認を求めるというニュアンスも感じられない。(18) ~ (20) で

は、話し手の率直な感情が表現されており、それについて「情報が受容できていない」とは感じられない。

### 3. 「ね」の意味

第3節では、初めに同意説を検討する。時枝（1951: 8）では「ね」を「聞手と同調者としての関係に置かうとする主體的立場の表現である」と規定する。次に佐治（1957: 466）では、「ね」は「話し手の聞き手に對する『問いかけ、同意を求める』ような氣持を表わす」とされる。そして鈴木（1976: 64）では、「ね」の意味は「聞き手に同意を求め、その意思を尋ねようとする」とであるとされる。

(21) 風が寒いね。（時枝 1951: 8）

(22) あの方はあなたのお父さんですね。（佐治 1957: 466）

(23) 「君の親は」と今度は首領は、二号に向って言った。「あいかわらず、君に空気銃を買ってくれないんだね」（鈴木 1976: 64）

これらの「ね」には「話し手の聞き手に對する同意を求める氣持を表す」があるという説は「ね」の本質をとらえていると考えられる。しかし、次のような「ね」はどうであろうか。

(24) 栄：いらっしやいませ。東京の阿川さんでらっしやいますね。

久司：よくわかりましたね。

栄：暇ですから。首長くしてお待ちしました。

久司：正直なんですね。（青春 I : 22）

(25) A：引っ越しましたよ。

B：いつですか。

A：ちょっとわかりませんね。（「永遠の仔」TBS）

(26) 松田：あんたひどい人だね。どれだけオレをバカにしたら氣がすむんだろ

うね。(かけおち: 183)

(24) は、家族で土肥に旅行した久司が、自分の勤める会社の系列のホテルに宿泊する場面である。「阿川さんでいらっしゃいますね」と聞かれて、「よくわかりましたね」と答える久司の発話に「ね」が使われているが、この「ね」には「聞き手を同調者としての関係に置こうとする」意図や、「話し手の聞き手に対する『問いかける』気持ち」や、聞き手の「意思を尋ねようとする」意図はないと考えられる。久司の次の発話「正直なんですね」の「ね」にも同じことが言える。(25) は、ある人物を訪ねた B が、隣に住む A にその人物は「引っ越した」ことを告げられ、「いつ引っ越した」のかを聞く場面である。隣の人物 A の答え「ちょっとわかりませんね」に「ね」が使われているが、この「ね」にも「聞き手に問いかけ、意思を尋ねようとする」意図は感じられない。(26) では、松田の康夫に対するストレートな感情に「ね」が付けられて表現されており、ここでも「聞き手に問いかけ、意思を尋ねようとする」意図は感じられない。

次に Uyeno (1971)、大曾 (1986)、そして陳 (1987) を紹介する。

Uyeno (1971: 117) は「ね」について次のように説明する。『『ね』を使い話し手はある事柄に対する自分の推定に対して、聞き手からの同意を期待している』(訳文は引用者による。以下同じ。)

(27) ジョンは出かけましたね。(Uyeno1971: 117)

しかし、「ね」が「話し手の推定」に対する、聞き手からの同意への期待だけを表現するのではないことは (24) ～ (26) を見れば明らかであると考えられる。そして Uyeno (1971: 118) では「ねえ」について次のように指摘される。

「ねえ」は話し手と聞き手が窓からジョンが出かけたことを見ている場合に使うことができる。話し手は自分の評価に対する確認を求めているのではなく、同意を求めている。

これと同じ主旨のことが大曾 (1986: 93) でも指摘されている。『『ねえ』は詠嘆を表わすと言っても、実際に使われるのは会話において相手も多分同意見ではない

かと話し手が判断した場合のみではないだろうか。」更に、陳（1987: 99、100）では「ね」の性質の1つとして次のような指摘がされている<sup>1</sup>。

「ね」のほうは、聞き手自身の認識を成立させることのほうにかなりの重みがあつて、それをいえば、聞き手も「ナルホドソウカ」と思ってくれるだろうというような同感の期待があるようにおもえるのである。

陳（1987: 99）で挙げられている例文を次に引用する。

（28）あんときは、さすがに俺も慌てたね。（『日夜のうさぎ』）

これらの説明は「ね」の本質に対して重要な示唆を与えていると考えられる。本稿ではこれら「ねえ」の性質と「ね」の一部の性質であるとされる事柄に修正を加え、「ね」の中心的な意味としようとするものである。

（29）これは私の父ですね。（テレビ番組）

（30）医師：思ったより子宮のまわりにガンが広がってしましてね。（「真昼の月」TBS）

（31）エリ：私、ゴウちゃんに話したいことがあるんだけど。

ゴウ：はい。

エリ：何も言わないで聞いてほしいのね。（「あいのり」フジテレビ）

（32）俺、親とかいないのね。物心つくころから、捨てられ、施設に入ってたから。（「漂流教室」フジテレビ）

（33）松田：オレのまぬけぶりに女房も愛想つかして家を出ちゃったんだからね。今、会社の若いもんが辞表出してそっちに向かつてるからね。

---

1 陳（1987: 97）では「ね」の基本的な用法として他に次の点が指摘されている。

「話し手が、自分の認識よりも聞き手の認識のほうがたしかだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識とおなじ水準まで高めようとするときに使われるもので、これは『念おし』といわれる。これがもっとも多くの使用例をもつ用法である。」つまり、ここでは「ね」の意味は、「話し手の認識を成立させること」であると考えられるが、本文で引用した陳（1987: 99、100）の「ね」の性質は逆に、「聞き手自身の認識を成立させること」に重みがあるとされ、終助詞の性質に話し手と聞き手の両方の認識を成立させることを認めることに矛盾が感じられる。

(かけおち: 201)

(18) 島崎: ムカツクわね! (「美川憲一の超穴場知ってんのよ!! in LA」テレビ朝日)

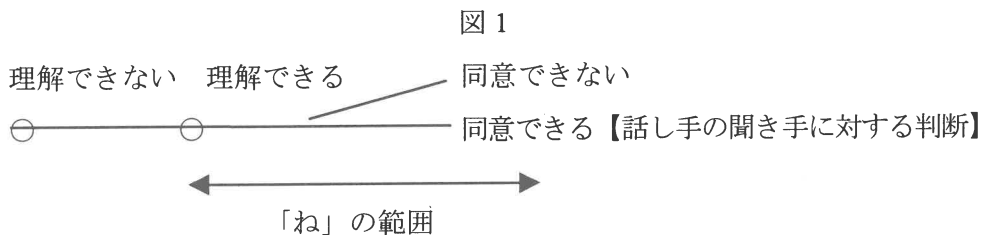
(29) は、テレビ番組の家庭訪問のシーンで、父親の位牌を指し示して「これは、私の父ですね」と説明する場面である。ここで使われている「ね」に「聞き手」の同意を期待するという意味はないと考えられる。「ね」が付かない「これは、私の父です」という文と比べると、「ね」が付いた「これは、私の父ですね」には話し手の聞き手がこの件について理解できるだろうという判断が感じられる。同じように (30) でも「ね」が付かない「子宮のまわりにガンが広がってしまして」と「ね」の付いた「子宮のまわりにガンが広がってしましてね」を比べた場合、「ね」が付くことによって医者が患者の家族にこの事実について同意を期待しているというより、話し手の聞き手がこの事態について理解できるだろうという判断が感じられる。(31) は、話を始める前のエリの発話であるが、「何も言わないで聞いてほしいのね」に「ね」が使われている。これは「[[何も言わないで聞いてほしい] の] ね」と分析でき、話し手が「何も言わないで聞いてほしい」という心情であるということ、聞き手が理解できると判断したという意味で「ね」が使われていると考えられる。(32) でも「俺、親とかいないのね」で身の上話を始めた主人公が、「ね」を使うことにより、聞き手の同意を期待しているのではなく、この件について聞き手が理解できるだろうという判断を下したということ表現していると考えられる。(33) は、電話で松田が主人公の康夫に向かって、騙されたことに対して抗議する場面である。「女房も愛想つかして家を出ちゃったんだからね」と康夫を責める松田の言葉に「ね」が使われているが、これは「ね」を使うことにより、松田の「俺の苦しみはお前も理解できるだろう」という判断が感じられる。続けて「今、会社の若いもんがそっちに向かってるからね」でも「ね」が使われているが、この「ね」には康夫を脅かそうとする松田の、「俺の怒りはお前も理解できるだろう」という判断が感じられる。(18) は「[ムカツク] わ」に「ね」が付くことによって、



私の怒りが美川に理解できるだろうという島崎の判断が感じられる。以上のことから「ね」の意味を次のように規定する。

「ね」：聞き手が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断を表現する<sup>2</sup>。

「ね」の意味に、聞き手が「理解できる」または「同意できる」という話し手の判断を表現すると、2つの表現をした。しかし、この2つは1本の線上にあると考えられる。図1を参照されたい。



本稿では「理解できる」の更に進んだ段階を「同意できる」であると考えている。もちろん「理解できる」「理解した」その先に「同意できない」場合もあると考えられる。よって「ね」の使用される範囲は「理解できる」から「同意できる」「同意できない」までであるとする。聞き手が「理解できる」が「同意できない」と話し手が判断した例は(30)のように医者への告知が考えられる。話し手である医者は聞き手である患者の家族に対して、「子宮のまわりにガンが広がっている」という事態について、同意はできないが、理解できるだろうという判断を「ね」を

---

2 「ね」は基本的に聞き手がいることが前提となるが、話し手が心の中で思ったことにも「ね」は付加できる場合がある。次の用例を参照されたい。

i) 江梨はマンションのロビーで郵便受を覗き、DMが二、三通入っているのを取り出した。——たまにはラブレターでも来ないかしらね、などと考える。(死: 23)

i) は、江梨が「たまにはラブレターでも来ないかしら」と心の中で考えたことであるが「ね」が使われている。「～ないかしら」は「願望」(国立国語研究所 1951: 27)を表現するとされる。これは話し手である江梨が架空の第三者を想定することによって、ラブレターが来ることへの願望を第三者に理解されるであろうこととして判断したという「ね」であると考えられる。

使用して表現するのである。そして、次の用例は、相手に対する非難や批判の気持ちが「ね」に込められている例である。

(34) 咲：いえ、今日は帰りません。その覚悟で、私…。

幸雄：君ねえ。(青春Ⅰ:40)

(35) 一之：説教くらったら、喉渇いたなあ。外、出たら冷たいのキューって  
ジョッキでどう？

一步：え？

一之：冗談だよ。

一步：あのねえ、お兄さまねえ。(青春Ⅱ:49)

(36) (家裁の調停員に、子供が母親に会うのを認めてほしいと言われて)

父親：何を言ってるんですか。冗談じゃないね。(「ひまわり」NHK)

(34) は、漫画家に弟子入りを希望する咲が、断られてもねばるという場面である。「今日は帰りません」という咲に向かって、弟子の一人である幸雄の、「何を言ってるんだ」という非難のニュアンスが、急激な下降調のイントネーションを伴い、「君ねえ」という言葉に込められていると言える。話し手は、聞き手に反対意見を述べているので、この「ねえ」には、聞き手は同意できないかもしれないが、少なくとも非難の気持ちは理解できるだろうという話し手の判断が感じられる。

(35) は、アルコール中毒になった、一之の退院祝いをするという場面である。「冷たいビールをジョッキでどう？」と冗談で言う一之に、弟の一步が「あのねえ、お兄さまねえ」と「ねえ」を使って軽く非難している。この「ねえ」にも、この非難の気持ちを聞き手は同意はできないかもしれないが、理解はできるだろうという話し手の判断が感じられる。(36) でも、「ね」に、「冗談じゃない」という非難の気持ちを聞き手は同意はできないだろうが、理解はできるだろうという話し手の判断が感じられる。

上に定義したように「ね」には聞き手配慮があり、「ね」は聞き手の理解、同意

が得られないことが明らかであるときは使用できない<sup>3</sup>。

(37) A：今何時ですか？

B：3時ですね。

A：えっ、もうそんな時間ですか？

B：ええ、もう3時ですよ。/\* ね。

(38) A：じゃ、お先に失礼します。

B：えっ、もう帰るの？

A：a. ええ、帰りますφ/\* ね。

b. ええ、明日、朝早いから帰りますね。

(37) では、「もうそんな時間ですか？」と疑問を表明する相手に対しては、話し手は聞き手が同意できないとして「ね」を使うことができない。(38) でも「えっ、もう帰るの？」と驚いている相手に対しては、話し手は聞き手が同意できないとして「ね」を使うことができないが、(38b) のように「明日、朝早いから帰りますね」と状況説明をすれば、話し手は聞き手が、「理解できる、または同意できる」と判断して「ね」を使うことができる。

本稿では「ね」に聞き手配慮があるとしたが、「ね」を使った文で冷たい表現に感じられる場合がある。次の用例を参照されたい。

(39) (前の主人、かをるを頼って、仕事を探しに来た弥太郎。「仕事はないですかね」と聞く弥太郎に対して、側から女中が間髪を入れずに)

女中：ありませんね。(「滞つくし」テレビ番組)

(39) では「仕事はないですかね」と聞く弥太郎に対して、女中の答えに「ね」が使われ「ありませんね」となっている。この発話が、そっけないものに感じられ

---

3 益岡 (1991: 100) で「ね」について「聞き手の同意が得られるのではないかという話し手の期待が込められる。この点は、『ね』が聞き手の同意が得られるかどうかが不確かであることを表す表現とは共起しにくい、という事実により確認される。」として次の例文が挙げられている。

i) ? 仲良くしてやってくださいね。だめですか？

たのは、「ね」の意味に、「聞き手が理解できる、または同意できるという話し手の判断」があるため、「ありません」という否定的な答えを聞き手が理解できるものとして「ね」を使って提示したことに原因があると考えられる。

「ね」は「聞き手が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断」を表現するため、聞き手に受け入れられやすくするという目的で前後に状況説明が付与されることが多い。次の用例を参照されたい。

(40) 年をとるとつまらないねえ。歯は悪くなるし、胃も弱くなるし、おいしい物を食べる元気もなくなっちゃうんだから。(春: 70)

(41) 美津子：磯辺さん、印度は観光でいらっしゃるのですか。

磯辺：あることを探りに行くんです。本当に宝探してみたいな旅です。

美津子：皆さん色々なお気持ちで、印度に向われるんですね。動物のお好きな方もいらっしゃったし、戦友の法要で行かれる方もおられるし。(深い: 47)

(42) 彼：(引用者注：妻の両親は) いい人たちなんだよな、すごく。

寺子：「結婚って、そういうところがすてきね。」私は言った。「今まで、他人だったいい人たちと親族になれるのね。」(夜: 31)

(40) では「年をとるとつまらないねえ」と話し手が「聞き手が理解できる」と判断したことに対する説明を「歯は悪くなるし、胃も弱くなるし、おいしい物を食べる元気もなくなっちゃうんだから」と続けている。(41) では美津子が「皆さん色々なお気持ちで、印度に向われるんですね」と話し手が判断したことに対する説明を「動物のお好きな方もいらっしゃったし、戦友の法要で行かれる方もおられるし」と続けている。(42) では、不倫相手の彼から妻の両親の話を聞いた寺子が、「結婚って、そういうところがすてきね」と話し手の判断を述べ、続けて「今まで他人だったいい人たちと親族になれるのね」と説明している。

「ね」の意味について「聞き手が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断を表現する」と規定した。しかし、これはあくまで話し手の判断であっ

て、もちろんそれが聞き手に否定されることはある。

(43) とら子：腹巻持ってたほうがいいと思うんだけどねえ。

大地：いらねえってば！行ってまいります。(青春Ⅱ:36)

(44) 浜口：やっぱり、犯人は女でしたね。営業部長は、除外されますね。

キャサリン：でもわからないわ。営業部長が、女装してたかもしれないで  
しょ。(天の:154)

(43) では、祖母のとら子は孫の大地に「腹巻きを持ってたほうがいい」という考えが理解されると考えて「ねえ」を使っているが、大地はそうは思わないで、「いない」と答えている。(44) は、殺人事件の起きた現場の近くで黒いコートを着た女性が目撃されたことを聞いた浜口が、「やっぱり、犯人は女でしたね。営業部長は、除外されますね」と「ね」を使い、聞き手も同意見だろうという判断を表現しているが、それに対してキャサリンは「営業部長が、女装していた」可能性について言及し、反対意見を伝えている。

次に一見すると本稿での「ね」の定義に反するように思われる2つの例について検討したい。次の用例を参照されたい。

(45) 小田：〔二人揃って、何の用だ〕ね。(死:309)

(46) 江梨：〔どうしたんだろう〕ね。(死:235)

(47) 木口：〔〔転生とは、このことじゃないでしょう〕か〕ね。(深い:321)

(45) は、一緒に来た江梨と森山に向かっての言葉であるが、疑問詞がある文に「ね」が使われている。これは「何の用だ」という話し手の疑問が、聞き手である二人に理解できるだろうという話し手の判断を「ね」が表現していると考えるのである。(46) は、いなくなった聡子を探す、江梨となつ子の会話である。聞き手のなつ子もきっと同意見であるだろうと判断して、話し手である江梨は「ね」を使って表現したものであると考えられる。(47) では「転生とは、このことじゃないでしょうか」という考えは、聞き手に理解されるだろうという話し手である木口の判断が「ね」で表現されている。

次に、相手の話を繰り返した後に付けられる「ね」について検討しよう。

(48) みずき：私の原作で描かない？ ハチャメチャ・ストーリー、得意。

咲：ハチャメチャねえ…。(青春Ⅰ:64)

(49) 麻子：でも売り場に活気添えるイベントってことで私は乗ったんだし。ビジネスじゃない？

久司：ビジネスねえ。おれたちは手作りで、頑張っただけだね。(青春Ⅱ:21)

(50) お兄さん：犬ねえ。いいだろう。犬だって、にがきや、いやがるから、そしたら、病気だ …。(窓ぎわ:502)

(51) 娘：(引用者注：手術が) 終わったら、何食べたい？

母親：そうだねえ。オムレツかな。(「真昼の月」TBS)

(48)は漫画家志望の咲が友人たちと漫画の懸賞に応募する相談をしている場面である。「ハチャメチャ（・ストーリーはどうかしら）ねえ」の略であると考えられ、話し手の疑問が聞き手にも理解できるだろうという意味で「ね」が使われていると考えられる。(49)では「ビジネスじゃない？」と言う麻子に対して、久司は「(それを) ビジネス (と言うのか) ねえ」という疑問があることを、「ね」を使って聞き手にも理解できるだろうという話し手の判断として麻子に伝えている。(50)は、病気か、元気か、かむとわかる木の皮を買ったトットちゃんが、犬のロッキーにも試してみると言ったのを受けてのお兄さんの言葉である。「犬 (はどうだろう) ねえ」の略であると考えられ、話し手の現在考え中であることに対して、聞き手が理解できるだろうという意味で「ねえ」が使われている。(51)は娘に「手術が終わったら、何食べたい？」と聞かれた母親が「そうだねえ」と考える場面である。「そうだ」に「ねえ」が付くことによって「今考え中である」ということが聞き手である娘に理解できるだろうという話し手の判断が伝わる。なお、この意味で発話される「そうね」「そうねえ」では「ね」は省略できないが、これはコミュニケーションの上で、「今、考え中である」ということを聞き手に理解してもらう必要が

話し手にあるため、話し手は聞き手が「今、考え中であることを理解できる」と判断したという「ね」が使用されるのであると考えられる。

#### 4. 確認要求の「だろう」<sup>4</sup>と「ね」

国立国語研究所（1960: 109）で、「話し手が自己の判断について、相手の確認を求めることの明瞭な表現である、確認要求の表現」として、「ね」、「だろう」は位置付けられている<sup>5</sup>。森山（1989a: 110）で指摘されているように、確認要求の「だろう」と「ね」には「聞き手情報配慮」という性質があり、両者が置き換え可能な場合も多い。

（52）a. 君、酒を飲んだね。

b. 君、酒を飲んだでしょう。（森山 1989a: 110）

第4節では、確認要求の「だろう」と「ね」の相違点について検討する。まず、先行研究を概観し、次に「だろう」と「ね」がどういう条件のとき、相互に置き換えられるのかについて考察し、最後に、どういう条件のとき、「だろう」が使えて「ね」が使えないのかについて考察する。なお、本稿では、「ね」について明らかにすることを第1の目的にしているため、確認用法以外の「ね」についても考察の対象とする。

##### 4-1 確認要求の「だろう」と「ね」の先行研究

確認要求の「だろう」と「ね」の違いについて、森山（1989a: 110）は、次のよ

---

4 「だろう」には、他にも「でしょう」、「だろっ」、「でしょ」などがあるが、本稿では、それらも「だろう」に含めて考える。

5 国立国語研究所（1963:53）は、確認要求表現について「話し手が自分の判断を相手に確認してもらおう、同意してもらおうとする表現である」と述べている。

うな一般化をしている。「話し手の述べる文について、話し手と聞き手が初めから同一意見であると見込まれる場合：『ね』、話し手と聞き手が初めから必ずしも同一意見と見込まれない場合：『だろう』」が使われる。

森山（1989a: 110）で挙げられている例文を、引用する。

(53) 乗客：奈良まで1枚下さい。

車掌：奈良ですね。/\*奈良でしょう。

(54) え？ お客さん、奈良でしょう。

森山（1989a: 110）によると、(53)で、「ね」が使われるのは、「車掌が今しがた聞いたばかりの『奈良』という情報が、客本人の情報『奈良』と相違ない」ということを「ね」が表すからであり、(54)は、「最初、奈良行きの切符を買うといていたお客が、『京都まで何分かかりますか』などと聞いた時の場合であり、客が奈良へ行くはずだという車掌の情報と、客が示した反応（京都までの時間を聞く）とが一致しないから、「だろう」のほうが使われる」と言う。

確かに、森山（1989a: 110）の一般化はこの例文をよく説明できる。しかし、「ね」については、前述の（34）～（36）、（48）、そして（49）の用例が反例となる。聞き手への、疑問や非難を表現する「ね」に、「話し手と聞き手が初めから同一意見であると見込む」ことはできないと考えられるからである。また、（30）、（33）、そして（18）についても、「話し手と聞き手が初めから同一意見であると見込む」ことはできない。「ね」は、必ずしも「話し手と聞き手が初めから同一意見であると見込まれる場合」だけに、使用されるとは言えない。

金水（1992: 54-57）は、「ね」について、「複数領域に存在する情報の同一性確認を要請する表現である」、これに対して、「だろう」は、「一方的書き込みであり、使用の状況として同一性の成立見込みに直接依存しない」と述べて、次の例文を挙げている。

(55) ?私、顔、赤いね。

(56) 私、顔、赤いでしょう。



金水（1992: 54）は、(55)のように「述語に直接『ね』が付く場合は、直接経験的領域と間接的経験的領域との間での確認である。普通の解釈としては、話し手の直接経験的知識と聞き手の直接経験的知識の同一性を確保する、ということに外ならない。従って、話し手も聞き手も、一緒に話し手の顔を直接見ることができる状況（即ち二人で鏡に向かっているような状況）でなければ適切でないのである」と指摘している。

宮崎他（2002: 217-219）は、「だろう」を「聞き手の認識についての確認<sup>6</sup>」であり、「ね」を「話し手の認識を聞き手に提示し、そのように認識することについて聞き手の承認を求めている」と述べて、次の例文を挙げている。

(57) 私、元気そうでしょう/\*ですね。

(58) あなた、元気そう\*でしょう/ですね。

宮崎他（2002: 217-219）の「だろう」についての指摘は、「ね」の意味との違いを明らかにしたと考えられるが、「だろう」は「聞き手の認識についての確認」だけに使われるとは言えないようだ。(59)は、「だろう」が聞き手を非難するのに使われている。

(59) 社長：桜井の女房も随分と強欲だな。

麗香：そんな言い方ないでしょう。（「DIMOND GIRL」フジテレビ）

また、先行研究では、「だろう」と「ね」がどういう条件のとき、相互に置き換えられるのかについてほとんど述べられていないと言える。そこで、本稿では「だろう」と「ね」がどういう条件のとき、相互に置き換えられるのか、また、相互に

---

6 仁田他（2000: 124）も、「だろう」について同様な指摘をしている。仁田他（2000: 124）は「だろう」の、話し手にとって推し量る余地のない確認ずみの事態である事柄について、「話し手の事態への捉え方のレベルからずれて、相手の認識状況に対する推し量りのレベルへ、そしてそのことによって、述べ方へとずれこんでいくのであろう。持ちかける、といったあり方で相手に向かって差し出せば、相手の認識状況を相手に確認することになる」と述べている。本稿では、国立国語研究所（1963: 53）と同じく、「だろう」を「聞き手への確認」から更に進んだ段階である「聞き手に同意を求める」表現であるととらえることにする。

置きかえられないのかについて統一的な説明をすることを目指す。

#### 4-2 確認要求の「だろう」と「ね」が相互に置き換えられる条件

本稿では、仮に、次のように確認要求の「だろう」を規定しておく。

確認要求の「だろう」：聞き手に積極的に同意を求める。

(60) (校長先生が、トットちゃんのお弁当を覗き込んで)

校長先生：きれいだね/\*でしょう。(窓ぎわ: 88)

(61) (アクセサリーを選びながら)

きれいだね/でしょう。

(60) のように、話し手が聞き手 (の持ち物) をほめるときには、「だろう」は、非文となっている<sup>7</sup>。一方、(61) のように、話し手に、聞き手が同意できるかどうか確かではないときには、「だろう」も使うことができる。次の用例を参照されたい。

(62) 小田さんのお世話になることは、承知しているのね/でしょう？ (死: 147)

(63) 咲：大変そうだなあ。

五十嵐：大変です。でも、大変さの中の楽しさ、知ってますね/知ってる  
でしょう？ (青春 I : 62)

(64) 神田：どうした？

江梨：え？ どうもしませんけど。

神田：隠してもだめさ。何かあったね/だろう。

江梨：凄いなあ。神田さんって、退院したら人相見たらどう？ (死: 174)

(65) 私のせいで死んだと思ってるのね/でしょう。なつ子ちゃんがそう言った  
んでしょう。(死: 131)

---

7 宮崎他 (2002: 217) も、相手をほめるときに、「聞き手の認識についての確認である『だろう』が使えない」と指摘している。

- (66) 森山君、君は、明美と付合ってたんだね/だろう。君のことは、明美から聞いたことがある。(死: 314)
- (67) (レストランのマネージャーに) タクシーにこの子を送らせてほしい。タクシーは呼べるね/だろう。(死: 229)
- (68) 康夫：もししのぶが萩原さんと一緒になったら、僕に嫁とらせて、あと継がせてくれるって言ってくれましたね/言ってくれたでしょう、あれ本当ですか、本当ですか？(かけおち: 181)
- (69) (20 年近く前、なつ子の母と小田が恋人同士であったと聞いて)  
なつ子：私……小田さんの子なのね/でしょう。そうなのね/でしょう。  
(死: 338)
- (70) ひとみ：(引用者注：彼と) 電話では話してる。なかなかここ(引用者注：病院)へは来られないけどね……。年末年始、彼の家って、たいがい香港とかハワイとかに行行って留守なんだ。  
江梨：そうか。じゃ、寂しいね/でしょう。(死: 167)
- (71) (電話で) ——しのぶさんですね。しのぶさんでしょう、何とか言ってください。  
(72) 小田：君には迷惑だったね/だろう。  
江梨：変な人。もう小さい子供じゃないのよ、私。断ろうと思えば断れたのを、こうやってついて来て、ごちそうしてもらったんだもの。  
小田さんが謝ることないわ。(死: 233)
- (73) 江梨：何を考えてるの？。  
なつ子：別に。  
江梨：嘘。——何か企んでるね/でしょう。(死: 190)
- (74) 康夫：京都だもの、いろんな人がいるさ。  
しのぶ：そう、京都だものね。  
康夫：おかみさんの手首見たかい。

しのぶ：見た、見た、切り傷があった（わ）ね/でしょう。（かけおち：136）

（75）江梨君がちゃんと聞いている。この男がインターホンで呼びかけたときの、  
明美の嬉しそうな声を。そうだね/だろう、江梨君。（死：324）

（76）酔ってるんですね/でしょう。（死：216）

「ね」を、「聞き手が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断を表現する」と規定したが、この話し手の「理解できる、同意できるだろうという判断」には確かさに幅があると考えられる<sup>8</sup>。（62）～（76）は、ほぼ話し手の判断の確かさが、低いものから高いものへと順に並べてある。一方、（77）～（88）は、聞き手が同意できるだろうという話し手の判断は、100%確かであると考えられる。そしてこれらの用例の「だろう」は全て非文となっている。ここから「ね」は、命題に対して、聞き手が同意できるかについて、100%確かではないということ、つまり、1%でも不確かな気持ちがあれば、「だろう」と置き換えが可能であるということが考えられる。

（77）江梨：お父さん、どう？。

なつ子：うん。寝たり起きたりだね/\*でしょう。（死：190）

（78）小田：ぜひ、あの若者にも君の芝居を見てもらわんとね。

江梨：そうできたらいいね/\*でしょう。（死：333）

（79）（江梨が稽古場を出ると、なつ子が待っている。）

なつ子：早いね/\*でしょう、今日は。

江梨：うん。（死：323、324）

（80）ひとみ：——へえ、ややこしいのね/\*でしょう。

江梨：巻き込まれるの、いやだな。（死：165）

（81）ひとみ：こっちも、そう子供じゃないんだから、絵にかいたような夫婦な

---

<sup>8</sup> 本稿では、「だろう」と置き換えられる「ね」について、「聞き手が同意できる」ことに対して、話し手は大体80%～99%の確かさを表現すると考えている。

んでいるわけないってわかってるのにね。

江梨：さめてるね/\*でしょう、ひとみ。(死: 167)

(82) 江梨：そんなの(引用者注：恋人)がいたら、ここでおじさんの相手してませんよ。

神田：いいにくいことをはっきり言うね/\*だろう。(死: 139)

(83) 直也：やあ、よく来てくれましたね/\*くれたでしょう。(「真珠夫人」東海テレビ)

(84) あ、江梨！やっぱり来てたのね/\*でしょう。(死: 163、164)

(85) (また、小田が出かけたと聞いて)

なつ子：おじさんも忙しいですね/??でしょう。(死: 184)

(86) 電話するね/\*でしょう！(死: 17)

(87) (男に突き飛ばされた麗香に対して)

会長：大丈夫？ レディにひどいことする男だね/\*でしょう。(「DIMOND GIRL」フジテレビ)

(88) (病室に見舞い客がたくさん訪れて、) にぎやかね/\*でしょう。(「真珠夫人」東海テレビ)

次の用例を参照されたい。

(89) a. 雪でも降りそうだね/そうだろう。

b. 雪でも降るだろう。

(90) a. 江梨君。なつ子にも恋人がいそうだね/?そうだろう。(死: 142)

b. 江梨君。なつ子にも恋人がいるだろう。

(91) a. 君には、何だか迷惑をかけてしまったようだね/??ようだろう。(死: 151)

b. 君には、何だか迷惑をかけてしまっただろう。

(92) a. あたしたちダメみたいね/\*みたいでしょう。もっと早くわかってりやよかったのにね。(かけおち: 169)

b. あたしたちダメでしょう。

(93) a. 商売にプラスになるとは思えんね/\*思えんだろう。(死: 311)

b. 商売にプラスにならないだろう。

(94) a. こんな時間だし、ダメかもしれないですね/かもしれないでしょう。

(b. こんな時間だし、ダメでしょう。)

(90b) ～ (93b) を見ると、話し手の推量を表現する助動詞、動詞の替わりに、確認要求の「だろう」を使うことができるということがわかる<sup>9</sup>。これは、「ね」と置き換え可能な「だろう」には、話し手の推量に関与しているということを裏付けるものとなる。ただ、(94 a) と (94 b) の意味には、話し手の確信度に差があることから、確認要求の「だろう」も、推量要求の「だろう」と同じように、話し手の低い確かさは表現しにくいということが言えると考えられる。また、(90a) ～ (92a) を見ると、話し手の推量を表現する助動詞と「ね」は共起できるが、「だろう」は共起しにくいということがわかる。これは、「ね」が直接、話し手の命題に対する推量を表現するのではなく、「聞き手が理解できる、または同意できるだろう」という話し手の判断を表現する」ためであると考えられる。次の例を参照されたい。

(95) a. パリ行きの話があるそうですね/\*そうでしょう。(「おいしい関係」フジテレビ)

b. パリ行きの話がある (ん) でしょう。

「伝聞形『そうだ』は『だろう』と共起しない」(安達 1999: 138)。確かに、「そうだ」に直接「だろう」をつけることはできないが、「そうだ」に「ね」を付けた

---

9 仁田他 (2000: 122-125) は、推量の「だろう」と、様々なタイプの確かさの度合いを差し出す副詞が共起すること、そして、「もしかしたら」「ひょっとしたら」の類の副詞も、推量と共起可能であるが、きわめて少ないと指摘している。また、推量と確認要求の双方にまたがる「だろう」があり、それは「話し手が、確信に至らないというあり方で、事態を相手に差し出し、事態の確定化への情報を相手に有している可能性がある場合であれば、運用論的に確認要求の意味合いが発生するものと思われる」と述べている。

(95a) と命題に「だろう」を付けた (95b) が、ほとんど同じ意味を表現できる。これは、伝聞形式では、人から聞いたことを伝えるため、話し手が 100% 確信を持って「聞き手が同意できる」という判断はできないため、(95b) のように「だろう」を使うことができるのであると考えられる。

次に一見すると、反例と思われる 2 つの例を検討したい。1 つ目は、話し手の確信を表現しているように見える例である。

(96) 旅の伴と言え、駅弁ですね/でしょう。

(97) SMAP と言え、キムタクですね/でしょう。

(98) 今は、ミュージカルの時代ね/でしょう。(死: 203)

(96) を見ると、話し手は「聞き手が同意する」ことに確信を持っているように感じられるかもしれない。しかし、電車の旅をしない人たち、または、写真好きの人にとっては、回答は、「カメラ」であるかもしれない。つまり、回答にいくつかの選択肢があり、話し手は「聞き手が同意する」に対して、100% の確信を持っていないのではないかと考えられるのである。よって、(96) のように「だろう」を使うことができる。(97) は、キムタクのファンなら、100% に近い確信を持って発話されるだろうが、香取慎吾ファンにとっては、「SMAP と言え、香取慎吾ですね/でしょう」となることが予想される。(98) は、更にいろいろな選択肢が予想され、話し手の「聞き手が同意する」ことに対する確信度は下がると予想される。よって、「だろう」を使うことができる。

もう 1 つは、次の発話の前提となる文に使われる「だろう」である<sup>10</sup>。

(99) (道を聞かれて)

あそこに高いビルがありますね/あるでしょう。あそこを、右に曲がると、

---

10 鄭 (1992: 117) は、「だろう」を確認要求と認識要求の 2 つに分け、認識要求の用法は、「当該内容についての聞き手の認識状態が不明な時に使われるものであるから、『だろう』文は次の発話のために、発話される場合が多い」と指摘している。

左にあります<sup>11</sup>。

(100) (病院で、なつ子の父親が初めて口をきいて)

神田：ありがとう……。君には……。二度も助けてもらったね/\*だろう。

a. 江梨：そんなこと……。話せるんですね/\*でしょう！

b. 江梨：そんなこと……。話せるんですね/でしょう。どうしてなつ子さんに話しかけてあげないんですか。

(99) では、話し手は、聞き手と同じ場所において、ビルを指差しながら説明しているの、話し手は「聞き手が同意できるだろう」という 100%の確信を持って「ね」を使っていると考えられるが、「だろう」を使うことができる。この発話のポイントは、「あそこを、右に曲がると、左にあります」の部分であり、「あそこに高いビルがありますね」はその前提となっている部分である。(100) の 2 つ目の「ね」であるが、江梨は、神田が実際に話しているところを聞いた後での発話なので、100%の確信を持って「ね」を使っており、「だろう」を使うことができない。しかし、(100b) のように、次の発話「どうしてなつ子さんに話しかけてあげないんですか」の前提となる文としてなら、「だろう」を使うことができる。(100) の 1 つ目の「ね」も、もし続けて神田が、「だから、あの時の恩返しをしたいんだ」と、言ったら、「だろう」を使って「君には……。二度も助けてもらっただろう」と言うことができるようになる。このように、次の発話の前提となる文としては、話し手が「聞き手が同意できるだろう」ということに 100%の確信を持つ「ね」が、「だろう」に置き換えられる。これは、単独の文では、不安定となる「だろう」が、後に続く文の前提となることで、1 つの文として成立していると言える。これは、「だろう」に「聞き手に積極的に同意を求める」という意味があるためであると考えられる。次に述べることの前提としての文では、必ず、聞き手に理解（同意）されていることが必

---

11 同様の例文が、蓮沼 (1995: 392) でも挙げられているが、蓮沼 (1995: 392) は、この用法は、「認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様な認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認する<共通認識の喚起>として位置付けている。



要となるため、「聞き手が同意できること」に対して 100%確信を持つ「ね」と置き換えられるのではないかと考えられるのである。

#### 4-3 「だろう」が使えて、「ね」が使えない場合<sup>12</sup>

木村・森山(1992: 11)は、「ね」と対立する「だろう」について、次のように述べている。

話し手において当該情報が正しいと認識されている一方、相手がまだその認識に至っていないという情報保持関係において発話され、あえて判断を形成させるようにしむける——つまり確認を押し付ける——のである。これが確認の意味になる。

これは、次のような「だろう」をうまく説明する。

(101) (東次と別れた後も、彼のことが忘れられない真琴)

真琴：東次、今でも、私のこと、好き？

東次：急にどうしたの。あのとき、俺たちは終わってるでしょ/\*ね。(「元☆カレ」TBS)

(102) もう電話してこないでって言ったでしょう/#ね。じゃ、切るからね。(「おいしい関係」フジテレビ)

(103) (働いていた、レストランが取り壊されることになって)

百恵：他人事みたいですわね。

織田：仕方ないだろう/#ね。(「おいしい関係」フジテレビ)

話し手が命題に対して 100%確信を持って、なおかつ聞き手に同じ判断を形成させようとするとき、「ね」は使われにくいと言える。ところで、(102)、(103)は、非文ではなく、#のマークを付けたが、これは、この意味(聞き手に同じ判断を形成させようとする)では、「ね」は使われることはないという意味である。「聞き手

---

12 4-3 で、「ね」が使えないとしたほとんどの場合で「よね」を使うことができると考えられるが、本稿では、「ね」と「よね」は違う語であると考えているため、「よね」については考慮していない。

が理解できる、または同意できるだろうという話し手の判断を表現する」という意味なら「ね」も、使うことができる。次に、話し手が命題に対して 100%確信を持って、聞き手を非難する例を見てみよう。

(59) 社長：桜井の女房も随分と強欲だな。

麗香：そんな言い方ないでしょう/\*ですね。（「DIMOND GIRL」フジテレビ）

(104) (社長に、また来たのかと言われて)

麗香：話も聞いてくれないからこうして来てるんでしょう/\*ですね！  
（「DIMOND GIRL」フジテレビ）

次に、話し手が命題に対して 100%確信を持っており、「聞き手にあえて判断を形成させるようにしむける」とは言えない「だろう」を見てみよう。

(105) A：ありがとう。あなたの言う通りにして良かったわ。

B：そうでしょう/\*ね。

(106) (お客がソファで気持ちよさそうに寝ているのを見て)

旅館の女将：私だったら、起こされるのいやだな。

番頭：俺もいやかな。

旅館の女将：いやでしょう/\*ね！

(107) 松崎：この間の（引用者注：あなたにもらった）タイヤキ、本当に美味しかったですよ。

久利生：うまかったでしょう/＃ですね。（「HERO」フジテレビ）

(105) ～ (107) の「だろう」には、共通して「自信を持って主張する」話し手の心情が感じられる。これらの「だろう」も「ね」に置き換えることができない。

最後に、「ね」が話し手自身に対する評価を表す発話では使われにくいという事実を観察する。

(108) a.私、きれい（だ）??ね/でしょう。

b.（君）きれい（だ）ね/＃でしょう。

(109) a. 私、だめ (だ) ね/でしょう。

b. (君) だめ (だ) ?ね/でしょう。

(110) a. 私、今回、英語の成績よかったです?ね/でしょう。

b. (君)、今回、英語の成績よかったですね/#でしょう。

(111) a. 私、英語、下手だね/でしょう。

b. (君)、英語、下手だね/でしょう。

(108a) と (110a) は自分に対する肯定的評価であり、(109a) と (111a) は自分に対する否定的評価である。(108a)、(110a) の「ね」を使った「私、きれい (だ) ね」「私、今回、英語の成績よかったですね」が最も許容度が低く、それに対して、「だろう」を使った同じ文は自然な文になっている。一方、聞き手に対する評価の文 (108b～111b) は、聞き手をほめる (108b)、(110b) を除いて、ほぼ<sup>13</sup>「ね」も「でしょう」も使用できる。これは、語用論的に、冗談めかして言う場合を除いて、自分についての肯定的評価はしにくいいため、「だろう」を使い「聞き手に同意を求める」という意味を付加するのであると考えられる。自分に対しての肯定的評価の文が「ね」を使うと不自然になったのは、「ね」が「聞き手が同意できるだろう」という話し手の判断を表現する<sup>14</sup>ため、自分に対する評価に自信のない (もともと自分に対する評価は主観的色彩が入りやすいため) 話し手は「ね」を使用できないのである。これは形容詞文だけでなく、評価を表現する名詞文についてもあてはめることができる。

## 5. おわりに

本稿では「ね」の意味を「聞き手が理解できる、または同意できるだろう」という

---

13 (109b) のような相手に対する決定的な否定的評価は、例えば上司から部下へなど、相手を非難できる立場の人間の発話に限られると考えられる。

話し手の判断を表現する」と規定した。「ね」には終助詞の他に間投助詞、感動詞があり<sup>14</sup>、本文で検討した用例は終助詞「ね」のものだけであったが、この「ね」の中心的な意味は、間投助詞、感動詞にもあてはめることができる。次の用例を参照されたい。

(112) なっちゃん：私、コスタリカで4カ国目なんだけど、すごいね、コスタリカに來られて、ほんとうすごい良かったって思ってるのね。ケツァール見れたじゃん。(中略) やっぱいろいろ頑張ったつもりだけど100%自分に自信が持てたわけじゃないのね、いまでも。でも大介のこと、何があっても大介のこと好き、好きでいられるっていう自信はね、持てたの。(「あいのり」フジテレビ)

(113) でも、私も一応父親だからね、萩原さんを見てから君にやるのがなんか、もったいなくてね ... もったいなくて...。(かけおち: 100)

(114) 川上：この人(引用者注：樋口)、私のこともう好きじゃないみたいよ。  
小菅：そんなことないよ。ね、樋口。(「今夜、宇宙の片隅で」フジテレビ)

(115) じゃ、お祝いはまたにしよう。ねっ。(「さくら」NHK)

(112) は、テレビ番組の恋愛バスツアーに参加したなっちゃんが大介に告白をする場面である。「何があっても大介のこと好きでいられるっていう自信はね、持てたの」という発話の「自信はね」の部分に間投助詞の「ね」が使われているが、この「ね」には聞き手である大介に自分の気持ちをわかってもらえるだろうというなっちゃんの判断が感じられる。(113) では「私も一応父親だからね」に間投助詞が使われているが、「萩原さんを見てから君にやるのがもったいなくてね」という話し手の気持ちが、「私は父親だから」聞き手が理解できるだろうという判断が感

---

14 本稿では文の最後に来るものを終助詞、そして文の途中に来るものを間投助詞、そして他の単語の後ろに付かず独立して用いられるものを感動詞として位置付ける。

じられる。(114)は、「(樋口が)私のこともう好きじゃないみたいよ」と言う川上に向かって小菅がそれを否定する場面である。「そんなことないよ」の後に「ね、樋口」と小菅は樋口に向かって感動詞の「ね」を使って呼びかけているが、この「ね」にも、聞き手が同意できるだろうという話し手の判断が表現されている。(115)も感動詞の用例であり、同じことが言える。これで間投助詞と感動詞の「ね」にも終助詞の「ね」と同じように、聞き手配慮があることが確認された。

「ね」と「だろう」の比較を通じて、話し手の「聞き手が理解できる、同意できるだろうという判断」には確かさに幅があり、「ね」は、命題に対して、聞き手が同意できるかについて、100%確かではないということ、つまり、1%でも不確かな気持ちがあれば、「だろう」と置き換えが可能であるということ、そして「だろう」が命題に対して、話し手の100%の確信を表現するときは、「ね」に置き換えられなく、その場合、話し手と聞き手の間に、認識のギャップがあるものとなないものがあることがわかった。

## 参考文献

- 安達太郎『『だろう』の伝達的な側面』『日本語教育』95 日本語教育学会、1997  
-----『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版、1999  
大曾美恵子「誤用分析」『日本語学』5-9 明治書院、1986  
片桐恭弘「終助詞とイントネーション」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版、1997  
木村英樹・森山卓郎「聞き手情報配慮と文末形式」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』くろしお出版、1992  
金水敏「談話管理理論からみた『だろう』」『神戸大学文学部紀要』、1992  
-----「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』4月号、1993

国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一』、1951

-----『国立国語研究所報告 18 話しことばの文型 (1)』秀英出版、1960

-----『国立国語研究所報告 23 話しことばの文型 (2)』秀英出版、1963

佐治圭三「終助詞の機能」『国語国文』 26-7、京都大学文学部、1957

鈴木英夫「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』11月号、東京大学、1976

鄭相哲「いわゆる確認要求のネとダロウ」『日本学報』11 大阪大学文学部日本学研究室、1992

陳常好「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』 6-10、明治書院、1987

時枝誠記「対人関係を構成する助詞、助動詞」『国語国文』 12月号、京都大学文学部、1951

仁田義雄『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房、1991

仁田義雄・工藤浩・森山卓郎、仁田義雄編『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店、2000

蓮沼昭子「続・日本語ワンポイントレッスン」『月刊言語』 6月号、1988

益岡隆志『モダリティの文法』くろしお出版、1991

宮崎和人・安達太郎他、仁田義雄・益岡隆志他編『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版、2002

森山卓郎「認識のムードとその周辺」仁田義雄編『日本語のモダリティ』くろしお出版、1989a

-----「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 第1巻 日本語学要説』明治書院、1989b

Uyeno, Tazuko A Study of Japanese Modality Ph.D dissertation, University of Michigan, 1971

引用資料〔（ ）内に本稿中用いた略称を示す〕

<小説、ドラマのシナリオ> (にぎやか)『にぎやかな部屋』星新一 新潮文庫  
1980/ (かけおち)『青春かけおち篇』つかこうへい 角川文庫 1984/ (青春 I、II)  
『青春家族』NHK ドラマ 1992/ (深い)『深い河』遠藤周作 講談社 1993/ (死)  
『死と乙女』赤川次郎 新潮社 1995/ (窓ぎわ)『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹  
子 鴻儒堂 1993/ (天の)『天の橋立殺人事件』山村美紗 講談社 1993/ (夜)『白河  
夜船』吉本ばなな 角川書店 1992/ (春)『春の飛行』曾野綾子 文藝春秋 1977